

# 『義経記評判』にみる『義経記』理解の試み

——近世における『義経記』受容の一例として——

西村 知子

## 一 『義経記』の「軍記評判」として

元禄十六年（一七〇三）刊行の『義経記評判』は、『義経記』本文を中心にそれに対する注釈や本文の校合、そして「評」による内容についての批判・批評、また「伝」として異伝・異説等を収載するものである。この『義経記評判』は、近世前期の『太平記秘伝理尽鈔』（以下「理尽鈔」とする）に始まる「軍記評判」の盛行にのって、『義経記』を総合的に理解しようとした一つの結果と考えられる。

これまで『義経記評判』は『異本義経記』との関係や注釈的部分の引用書について検討されてきた<sup>①</sup>。その中で「軍記評判」として位置づけられるものの、『義経記』自体との距離を測られることはなかった。一見、『義経記評判』は「理尽鈔」に代表される初期の軍

記評判からはかなり様相を異にしている。しかし、『太平記評判』

において確立された「評」・「伝」を基調とする方向性が、『太平記大全』・『太平記綱目』・『義経記評判』などでは「語釈・注釈の比重が増しているけれども、基本的には、後続の軍記評判に継承されている」とし、『首書太平記』にも軍記評判の影響がみられると加美宏氏が述べられるように、<sup>②</sup>『義経記評判』において、『義経記』理解のために「軍記評判」の方法が受け継がれ用いられているのである。本稿では、『義経記評判』を『義経記』受容の一つの形としてと

らえ、「軍記評判」というスタイルで『義経記評判』が『義経記』をどのように理解し、また『義経記評判』つまりは『義経記』を享受する側にどのような内容の理解を提供しようとしたのか検討を行い、その全体像を明らかにすることを試みる。そしてそれは近世における『義経記』受容の様相を、さらには「軍記評判」という形で

の中世軍記物語受容の一端を示すものと思われる。

なお『義経記評判』の伝本としては、元禄十六年（一七〇三）、享保四年（一七一九）、また刊年不明のもの三種の刊記のものが確認される。元禄十六年とするものは刊記に「于時元禄十六癸未歲孟春大吉祥日 跡より 義経再改記 板行 京押小路通麩屋町西江入町金屋 書肆 安浦市兵衛刊行」、外題は「頭書絵入 義経記評判 系図伝記大意附録入」となっている。享保四年のものは刊記に「享保四年 己亥正月吉旦 大坂安堂寺町心齋橋筋 書肆 大野木市兵衛」、こちらの外題は「頭書絵入 義経記大全 系図伝記大意附録入」とあって、外題を『義経記大全』とするものである。また刊年不明のものは巻末に「大坂 書厨 千庫仁兵衛」とだけあって刊年は記されておらず、外題は「義経記評判」とあるが後から付されたもののようである。三種とも本文は全く同じのものであり、内題は「義経記評判」となっている。元禄十六年本では東京国立博物館蔵本（八巻十四冊）・東京芸術大学蔵本（八巻十四冊）・筑波大学蔵本（七巻十三冊／巻一欠）・京都大学蔵本（七巻七冊／巻八欠）・高岡市立中央図書館蔵本（国文学研究資料館蔵マイクロフィルムより）（三巻一冊／巻六上下・巻七下）・上田市立図書館花月文庫蔵本（国文学研究資料館蔵マイクロフィルムより）（二巻一冊／巻八）の六本、享保四年本は大阪府立図書館蔵本・筑波大学蔵本・東京大学

蔵本（いずれも八巻十冊）の三本、刊年不明本は和歌山大学紀州藩文庫蔵本（八巻五冊）の一本が確認される。

## 二 『義経記評判』の注釈と校合

『義経記評判』は、『義経記』本文・首書（頭注）・割注・「源遮那王丸像伝」とその挿絵・序文・凡例・系図・目録・跋文で構成される。

ここでは、首書・割注を用いた語句等の注釈・本文の校合の方法の具体的な検討から、『義経記評判』が『義経記』をどのように理解しようとしているかを考察してみたい。

序文によれば、『義経記評判』<sup>③</sup>の著者松風庵は書肆に求められて「首書義経記」を著し、その後書肆が「評判の二字を加ふ」とあって、「評判」とした書肆の判断は間違っていないかったように思われるが、所期の目的としてはいわゆる「首書」を付した『義経記』であったようである。その凡例に「諸家の伝記并神社仏閣名所旧跡引文引歌等本文に便りある説ま、首書にあらはす」と記されるように、『義経記評判』の首書では項目をあげて語句等に対する注釈を加えている。首書に取り上げられる全体の項目の総数は七十六項目で、巻一では二十八項目、巻二上・下では十四項目となっているが、巻が進むに従ってその項目数は減少傾向にあり、後半は十項目以下

となっている。

たとえば、『義経記』本文冒頭で列挙される人物の一人「たむら」について、

○田村 くわんむ天皇二十年坂上田村丸勅をうけて奥州におもむき王命にしたがはざる悪徒をほろほし給ふ嵯峨の天皇弘仁二年五月十三日に卒す至<sub>レ</sub>今八百九十三年近江の国甲賀郡土山に正一位田村大明神とまつるは是なり

（巻一「一 よしとも都落の事」）

と首書され、坂上田村丸の説明とその死去した年と今に至るまでの年数を記している。また牛若が隠れて武芸の修行をした鞍馬僧正が谷について、

○僧正谷 くらま山のおくにあり不動明王示現の霊地なり

（巻一「五 牛若きぶねまうでの事」）

というように説明され、その他にも引歌を用いて名所旧跡を紹介する方法も採られている。このように、歴史的人物・地名・名所旧跡についての説明等、『義経記評判』の首書においては一般的な知識・教養を述べるのが目立つ。

また割注は約六百五十箇所あり、一つに語句の注が重なったり他本との校合が合わさったりしている箇所もある。次の「一」内（「一」内は割注部分を示す。以下同じ。）のように、

『義経記評判』にみる『義経記』理解の試み

ち、よしともは平治元年（人王七十八代二条院の年号也）二月廿七日に〔平治物語には十二月廿七日とありうたがふらくはこ、に十の字を書おとせし物ならん〕衛門のかみ信頼卿にくみして。

（巻一「一 よしとも都落の事」）

年号の説明や、凡例に史書として挙げられる「保元物語平治物語東鑑盛長日記平家物がたり源平盛衰記諸家大系図等」のような他文献を用いて考証を行ったりしている。

さらに、

まつらさよ姫がひれふるのべに年をへし〔ひれふる山なるべしひれふるのべといへるはあやまり也〕

（巻二上「一 かゞみの宿がうどうの事」）

と「ひれふるのべ」について「あやまり也」と語句を訂正したり、あはれ末の世に平家のためには（中略）下野の国にしもさへと申所に候といひしなり〔あはれすへの世にといふよりはまではみさゞ木がことばなり〕

（巻二上「四 義経みさゞきがたちをやき給ふ事」）

と陵の会話部分を提示する。『義経記評判』においては「軍記評判」の流れを継承しながら、新たに注釈という方向性が強められていると関英一氏は述べられるが、その注釈は人物・名所旧跡といった語句の説明から『義経記』本文の解釈にまで及んでいるので

ある。

これに加えて『義経記』本文の校合が行われている。その校合は「たまく芳野本にたづねて板本の誤を正し」(序文)、「正本を以校合」(跋文)、また「本文の下に断所は正異の齟齬文字のあやまり年歴の違目等芳野本をもつて校合」(凡例)というように芳野本『義経記』との校合を中心として行われているのである。芳野本『義経記』は現存のものは静嘉堂文庫蔵の一本のみであり、流布本的な本文に増補改変が施された特殊な『義経記』である。<sup>⑤</sup>この芳野本が、「芳野本といへるは予が家に久しく所持の本なり今の板本と異同有今是によつて改正す」(凡例)とあるように著者の手元にあったようだ。ただし芳野本とあつても現存の芳野本と合致しない記述もあつて、芳野本自体のあり方も含めてさらに検討が必要と思われる。『義経記評判』中では「よしの本(には)」とする芳野本との校合だけでなく、「一本(に)」「イ(い)本(に)」「ある本」(「あるいは」といった形で示されるものもあり、芳野本と明記したものが約二百箇所、それ以外と思われるものが約五十箇所となっているたとえば、

永暦元年(人王七十八代二条院年号)正月十七日の暁。ときは三人の子共ひきぐして。大和国うだのこほりきしのおかといふ所に。けいやくのしたしきものあり(よしの本には二月十一日

の夜に入て三人のおさなき人を引きぐし大和国うだのこほりりうもんといふ所にたづねいたりおちをたのみてかくれ居けりとぞ)是をたづねて行けれども。世間のみだる、をりふしなればたのまれず。其国のだいとうしといふ所にかくれ居たりける。

〔一本に大蔵寺とあり〕

(巻一「二ときはみやこ落の事」)

の傍線部のように、芳野本の該当部分を付記している。また、波線部のように「一本」による本文を挙げているが、この部分を「大蔵寺」とするものは未見で、この「一本」が何を指しているのかは確定しない。またこの部分の芳野本は現存の芳野本本文と一致するが、たとえば、

小納言信西と申せし人の母かたのおぢ。みさぎの介と申人の嫡子みさぎ木の兵衛とそ申ける(みさぎか事けいつにみへずよしの本にみさぎ木の四郎ためすけと有りしんせいがは、がたのおぢといふ事はみへず)

(巻二上「三あの、ぜんじに御たいめん」の事)

のように芳野本を用いて考証・訂正する部分や、

河つらの法眼(川くらなるべし前にみへたり此所にいたりて板本をはじめよしの本に河つらと有は伝写のあやまりなるへし)其日の矢合にしそんじて何の用にもあはせで。

(巻五下「一忠信よし野山合戦の事」)

のように芳野本の記述を訂正することを試みる部分などにおいて、これら『義経記評判』が芳野本とする本文は、現存の芳野本とは合致しない記述であり、先にも述べたように現存する静嘉堂文庫蔵本と同様のものを松風庵が手元に置いていたかどうかは疑問の残るところである。

このように『義経記評判』においてその注釈・校合は、基本的な語句の意味から、内容の解釈、また他文献との比較、そして『義経記』本文の詞章の比較検討にまで及んでいる。これらは、『義経記』本文自体を解釈し、その理解を深めようとするものといえる。

『義経記評判』が執筆された時期としては、凡例に、「凡伝記に繫所おの／＼紀積年」其例皆卒する年より元禄十五年にいたるまで相去の数をしるし尊丈某は至今幾千百年を得ると云事をしらしむ」とあるように、元禄十五年（一七〇二）前後とみられ、完成後程なく刊行されたものと思われる。この時期までに『義経記』においては、古活字本をはじめとして寛永十年（一六三三）から元禄十二年（一六九九）にかけて十数種の整版本『義経記』が刊行されており、「今此義経記は（中略）ふるく世にながれあまねく人のもてなやみ草になりて古をしたひ今をしるぶすがともなれる」（序文）、また「世間に義経記は板本多し」（跋文）というように『義経記評判』に記されるのは、『義経記』の流布・享受の実際状況とそれほど遠

いものではないであろうと思われる。版本化による『義経記』享受の拡大は、『義経記』の本文について注釈・校合し解釈する『義経記評判』が登場する一つの要因として挙げられるであろう。

また、『義経記評判』元禄十六年本の刊記に記される「跡より義経再改記 板行」について、詳細は不明であるが、『義経記評判』巻七下「四 判官ひらいづみへ御着の事」の割注に「七のまきの始終八のまきにくはしくしるしをき侍りなを義経さいくはいきにくわしくしるすものなり」とあって、『義経記評判』のあとに、同じ著者による『義経記評判』の続編といえるような内容の「義経再改記」刊行の予定があったものと思われる。この元禄十六年本を刊行した「書肆 安浦市兵衛」は金屋市兵衛のことで、『義経記評判』の次に「義経再改記」なるものも計画していたようである。この金屋において、『義経記評判』刊行直前の元禄十五年（一七〇二）に、『義経記』をベースにした浮世草子『御前義経記』（元禄十三年（一七〇〇））に続く西沢一風による『女大名丹前能』が刊行されている。『義経記』を当世化し、その新たな面白さを創出するという<sup>⑦</sup>『御前義経記』の浮世草子としての成功はまた、『義経記』自体にもスポットを当て、『義経記評判』という『義経記』本体の理解を深めようとする試みに少なからず影響を与えたと思われる。このような一連の動きが、同時期に金屋周辺において行われていた

ということは非常に興味深いことといえる。

### 三 『義経記評判』における「伝」と「評」

『義経記評判』では、全編にわたって「軍記評判」における「伝」的な内容をみることができる。この「伝」的な内容の部分は、後半部になると『義経記』本文についての異伝・異説の記述の分量が増えて、たとえば、義経主従の北国落ちについて、

○義経奥州へをち給ひし時山伏の姿になり給ふ皆以て其姿となる（中略）或曰彼関を通り給ふ時大櫓が下人見とがめたりしを（中略）をの／＼をとをしけりと云々

（巻七上「一 判官北国落の事」）

と首書される。これは『異本義経記』からの引用であり、かなりの分量を用いて異伝・異説を収載している。この首書・割注の他に巻頭の「像伝」・「系図」にも『異本義経記』が引用されている。このように『義経記評判』では『義経記』の異伝・異説を述べるのに、その大半を『異本義経記』に依拠している。

その中でたとえば、

○伝曰元暦二年二月十六日義経八嶋へかどての時大くらの卿やすつね朝臣かのてにいたり給ひのたまひけるは（中略）それより四国へ打立給ふと云々

（巻四上「三 よしつね平家の討手に上り給ふ事」）  
という記述は『異本義経記』<sup>⑤</sup>の、

元暦二年二月十六日義経八嶋へ首途ノ時大藏卿泰経朝臣彼亭ニ至リ給ヒ宣ヒケルハ（中略）其ヨリ四国へ打立給フト云リ

（上巻37丁オ）

という記述を取り込んでいるものである。『異本義経記』の「伝」と「評」については、先に論じる機会を得たが、その『異本義経記』の「伝」的な部分について、『義経記評判』の著者がそれを「伝」として認識し引用していたことがわかる。『異本義経記』では「伝曰」いった形で「伝」であるということを明記しない場合が多くあり、ここで挙げた屋島合戦前の義経と泰経のやりとりについても同様である。それが『義経記評判』では二重傍線部のように「伝曰」と冒頭に付され、この『異本義経記』記事を「伝」として捉えた上で取り込みを行っているのである。これはつまり『異本義経記』のそういった内容の記事が「軍記評判」の「伝」とつながるものであるという認識によるものと考えられ、『異本義経記』が当時どのように位置付けられていたかというを示す例といえよう。

また、登場人物の心情を解き明かすような記述も見られる。吉野山での静との別れの場面、静と別れられない義経に、弁慶は女性連れの義経と離れて我が身の安全を図ろうと片岡に言い、片岡は知

らぬふりをしてはつておけと答える場面で、『義経記評判』では、

判官しづかをふかくおもひ入給ひてよし野山まてめしぐし給へは道すがら人のあやしむべき事をおそれ何とそしてしづかをはなれ給はんやうにと思ひはかりかねてへんけいとかたをかしめし合てかやうにつふやきけるなるへし

(卷五上「一 判官よし野山に入給ふ事」)

と、義経の心中を推し量った弁慶と片岡が示し合わせて行つたことだと解き明かし、また義経の方も、

よしつねさとくましませはべんけいなどか心ていをさつしかくいふはしづかを是までぐしたるゆへそとくりやうけん有し也

(同右)

と逆に彼らの心を察していたのだとする。これは、実とは明かす「伝」とその行動を評価する「評」を合わせた内容となっているが、登場人物の心情・行動に注目しそれについて『義経記評判』独自の見解を示しているといえる。

『義経記評判』の「評」的な記述についても、「評」と明記する場合、しない場合があるが、『義経記評判』全体にわたって「評」的な記述を見ることができるといえる。

吉野で義経一行と別れ、一人都へ戻ってきた佐藤忠信が六波羅方に追いつめられ、最期の場所を義経ゆかりの六条堀川の邸を選んだ

『義経記評判』にみる『義経記』理解の試み

ことについて、『義経記評判』では、

○評にはくよしつねのすみ給ひし六条ほり川の家は判官都をおち給ひていまだ日かずもいくばくならざるにかちはらかげひさ申あづかりてすみ待ると云々しからばたゞのぶ此家に入来りけるとはいかゞ

(卷六上「二 たゞのぶさいごの事」)

と忠信が屋敷に入ったことに異議を唱えるように、『義経記』本文の理屈に合わない内容を取り上げ批評・批判する。このような合理的な解釈は『理尽鈔』以来の「軍記評判」の方法を継承するもので、そのような視点から『義経記』を理解しようとするものである。

一方、『異本義経記』の場合と同様に『義経記評判』においても、義経をはじめとした登場人物の行動や心情を中心に評する傾向が見受けられる。たとえば先に挙げた忠信については概ね高い評価が与えられる。吉野山合戦で忠信に付き従った郎等六人が討ち死にしたことについて、

○評曰誠にたゞのふ其うつはかたければ付したがふ者といへども義をおもくし命をかくる事かくのごとしある説にたゞのぶよしの山にとゞまれる時は付したがふらうどう一人もなかりしはじめ奥州よりめしぐしたるもの八人有けれども八しまのかつせんにうち死してのこるものあらざりけると也

(卷五下「一 忠信よし野山合戦の事」)

と忠信自身の人間性を評価する。しかし、『理尽鈔』の場合と同じく、ここでも是々非々主義が受け継がれたようで、忠信が女に名残を惜しんだことについては、

よしつねはしづかをぐしてよしの山に入給ふ故に山ほうしにさへられてうきめにあひ給ひたゞのぶは女になごりをおしみてためらひしばかりに命をすてぬまことにさふらひのつゝしむべきは色の道なり

（巻六上「一 たゞのぶ都へ忍び上る事」）

と、義経とともに忠信に対する厳しい評価を見ることができると、

『理尽鈔』では「評」において、大将としての心構え・為政者の心得といった軍略・政治性、倫理・道徳的な事柄を評する点が挙げられるが、『義経記評判』において評されるのは「義」であり「色の道」であって、『理尽鈔』とは異なる視点といえるであろう。ここでは軍略・政治性によらない一般的・普遍的な倫理性や人間性、常識や機知といったものの評価に重点を置く傾向があり、そこに『理尽鈔』と『義経記評判』の想定する享受者層の違いが反映されているとみることができないだろうか。

たとえば、子どもたちのために清盛に従った常盤について『義経記評判』では、

ときはが母せきやと申ものやまも、町に有けるを六条より取出しがうもんせらるゝよし聞えければ。ときは、是をかなしみ。

母の命をたすけんとすれば三人の子どもをきらるへし。子共をたすけんとすれば老たる母をうしなふべし。子におやをばいかゝおもひかへさふらふべき。おやのけうようするものをばけんならう地神もなうじうあるとなれば。子どものためにもなりなんとおもひつゞけ。三人の子を引くして泣く京へぞ出にける

（巻一「二」ときはみやこ落の事」）

という『義経記』本文に、割注として芳野本の、

よしの本にときはが母をからめとつてたづねよとてろくはらへめし出しやうくこにいましめとはれけり母なくく申けるはわれ六十にあまる身のいのちあすをもしらぬおひの身をおしみていまだゆくすゑながき孫どものいのちをばいかでうしなひ侍へきなればしりたりとも申まじましてしらぬゆくゑなにとか申侍らんとくどきければ水火のせめにもおよぶべかりしをときはうだのこほりにて此よしつたへき、われゆへは、のうき目にあひ給ふらんこそかなしけれ仏神三ばうもさこそにくしとおぼしめすらめ子ともに母をおもひかへてしのぶべきにあらずとて三人の子どもを引くして六はらへまいると云々

という、『平治物語』と同様の、我が身を犠牲にしてまでも孫たちを守ろうとする常盤の母の記述を挿入する。さらに続けて、

私曰よのつねの人は老たる母をうしなふ共後世をこそとふらは

めおさなき子共をばいかにころさんと思ふべきに子共をばうし  
なふ共母をたすけんと思う孝行のこゝざしは尤よしさりながら  
後には子どもにまよひて夫の道をわすれ貞節をうしなひ清もり  
の心にしたかひ給ふ事浅ましき心ていなるべしもちろんかたき  
の手に入て夫のあたを報ずる事もあるべきかなれどもときはに  
於ては其志みへずしかも後に清もりになれそめて女子を生ずと  
也

というような、平治の乱後の常盤の身の処し方について『義経記評  
判』独自の見解が提示され、ここでは夫の敵である清盛に従った常  
盤の行動・心情が批判される。この『義経記評判』の「評」は、あ  
る意味女性への教訓・教化と受け取れる記述のあり方で、このよう  
な方向性は常盤や静などについての記述の諸処にみられるものであ  
る。

これについて、凡例に「大概俗語を用ひて平仮名にしるす事は少  
人女子の見やすからんが為なり」とあるように、『義経記評判』ひ  
いては『義経記』の享受対象として「少人女子」を想定していたと  
いうことは注目できるのではないだろうか。『義経記』においては  
その性格上、伝奇的・浪漫的な側面が強く、いわゆる御伽草子など  
と共通する世界を形成しており、それゆえに『義経記』は幅広く受  
け容れられやすいものであったといえる。そういった点から『義経

記評判』がその享受層としてそれらを想定していたということは、  
たとえば『理尽鈔』が『太平記』自体の性格を反映して治世・軍略  
の書として武士階級にもてはやされたという経緯を持つのに対して、  
『義経記』を基にした『義経記評判』のあり方を示しているといえ  
るのではないだろうか。

このように、『義経記評判』は広く一般大衆を対象とした「軍記  
評判」といえる。『義経記』享受の拡大にともない、その方法を用  
いながら最初から大衆という享受層を視野に入れた「軍記評判」と  
して、『義経記評判』が登場したのである。

#### おわりに

『義経記評判』においては、『義経記』本文に密着してその理解を  
深めることを試み、「軍記評判」という方法を踏襲しつつ、さらに  
それを独自に展開したものとなっている。そこには、『義経記』に  
みられる歴史的人物や名所旧跡等に対する注釈に重点を置き、『義  
経記』本文の解釈を行い、その内容についての批評・批判、異伝・  
異説を収載するという、総合的な理解の方向をみることができ  
る。享保四年本において『義経記』についての集成書・百科全書的なもの  
という『義経記大全』という外題が付されたのも、その方向性を  
示唆するものではないだろうか。

『義経記評判』の序文では、

古今武勇をもつて世に鳴者多しといへどもひさしく人口にあづかり都鄙遠境におよび貴賤老少ともに専名を称するものは唯義経一人のみ

と義経は評価される。義経は近世に入り、悲劇の英雄としてだけではなく、たとえば美男・好色の遊治郎<sup>③</sup>というような貴公子的側面を強調されて取り上げられるようになる。その傾向は義経の異伝・異説の方向性とも重なって、『義経記』もまた変容し、新しい分野においてさまざまな姿を見せるようになる。そういった新しい義経像の形成・強調される時期にあつて、『義経記』本体の総合的な理解が試みられたことは注目されるものであろう。

『義経記評判』にはそれまでの政治・軍略を説いた「軍記評判」のあり方とは異なり、『義経記』に登場する人物の心情に深く踏み込んで理解しようとする態度がみられる。それによって示されるものは、『理尽鈔』での武士階級中心に向けられた批評・批判ではなく、一般の人々が自分たちの思いを『義経記』の登場する人物たちの心情と重ね合わせることで理解され、指針となる倫理観・道徳観であった。そしてそれを可能にしたのは義経と彼をめぐる人物たちを中心に述べるという『義経記』の独自性であり、また『義経記』が広く一般に享受されたことによるものであろう。『義経記評判』

の登場は、近世という時代の流れのなかでの『義経記』の新しい受容の様相といえる。

# 注

① 島津久基氏『義経伝説と文学』（明治書院 一九三五）、高橋貞一氏『異本義経記』（仏教大学研究紀要）一九七三・三三、関英一氏『義経記評判』の注釈態度―引用書の検討を中心として―（『國學院大學大學院文学研究紀要』一六 一九八五・三三）。

② 加美宏氏『評判記の先駆―軍記評判』（歌舞伎評判記集成 第二期第七卷付録月報）岩波書店 一九八九／『太平記の受容と変容』翰林書房 一九九七 所収。

③ 『義経記評判』本文の引用は、特にことわりのないものは大阪府立図書館蔵本（『義経記大全』・享保四年）を使用（以下同じ）。なお私に旧字体等は通行字体にし、傍線等を付した。翻刻に際しては、吉澤義則氏編『未刊国文古註釈大系 第十四冊』（帝國教育会出版部 一九三四）所収の『義経記大全』を参考にさせていただいた。

④ 注①関氏論文。

⑤ 山岸徳平氏「芳野本義経記解題」（『静嘉堂文庫蔵 芳野本義経記』古典研究会 一九六五、志田元氏「芳野本『義経記』の一考察」（『伝承文学研究』九 一九六七・九）。

⑥ この金屋市兵衛について、井上和人氏（『西沢一風と出版書肆―初期作品の出版をめぐる交渉―』（『近世文芸』六四 一九九六・六））は『浮世草子の出版に実績のない書肆』ではとし、『女大名丹前能』と同じ元禄十五年正月に雑俳撰集『俳諧若えびす』（青木鷲水編序、北条団水跋）を刊行した以外、活動をつかむことができない。いずれ規模の小

さな書肆と見てよいであろう。」と指摘される。

- ⑦ 長谷川強氏（『浮世草子の研究』桜楓社 一九六九）は『御前義経記』の狙いは『義経記』に関する謡曲・舞曲・浄瑠璃等をかすめ、もじりながら、『義経記』を当世化することであったと指摘され、また神谷勝広氏（『御前義経記』小考―浄瑠璃との関連を軸に―）『日本文学』五二―一〇（二〇〇三・一〇）は『義経記』の持っていないかった新たな面白さを『御前義経記』は創出していると論じられる。

- ⑧ 『異本義経記』の引用は静嘉堂文庫蔵漢字片仮名交じり本を使用。なお私に旧字体等は通行字体にする。

- ⑨ 拙稿『義経記』と軍記評判―『異本義経記』の方法―（谷村知子）（関西軍記物語研究会編『軍記物語の窓 第二集 和泉書院 二〇〇二）・『異本義経記』の展開とその享受―『義経記』変容の過程―（同志社国文学）五八（二〇〇三・一二）。

- ⑩ 『理尽鈔』における為政者正成像については、加美宏氏（『太平記評判秘伝理尽鈔』をめぐって）『日本文学』三四三 一九八二・七／『太平記享受史論考』桜楓社 一九八五 所収）、佐伯真一氏（『合理的政治論としての『理尽鈔』／『太平記評判秘伝理尽鈔』輪読報告）『軍記と語り物』三三三 一九九七・三）、若尾政希氏（『太平記読み』の時代近世政治思想史の構想 平凡社選書 一九二 平凡社 一九九九、今井正之助氏（『太平記評判秘伝理尽鈔』『評』の世界―正成の討死をめぐって―）（長谷川端氏編『太平記の世界 軍記文学研究叢書 九』汲古書院 二〇〇〇）等によって言及される。

- ⑪ 山本淳氏（『曾我物語』の周辺―『曾我物語評判』の女性像―）（『国文学解釈と鑑賞別冊 曾我物語の作品宇宙』至文堂 二〇〇三・一）は『曾我物語評判』との関連において『義経記評判』の女性像について、良将としての武士の障害となるものといった点から論じられる。

『義経記評判』にみる『義経記』理解の試み

⑫ 注⑩加美氏論文。

- ⑬ 長谷川強氏「古典への招待 浮世草子の「ビーク」趣向主義の時代」（長谷川強氏校注・訳『新編日本古典文学全集 浮世草子集』小学館 二〇〇〇）。

#### 付記

本稿は軍記・語り物研究会第三五二回例会（二〇〇三年四月二〇日・於法政大学）での口頭発表の一部をもとにまとめたものです。席上ご教示いただきました皆様方に感謝申し上げます。また閲覧・複写等の便宜を賜りました諸機関に厚く御礼申し上げます。